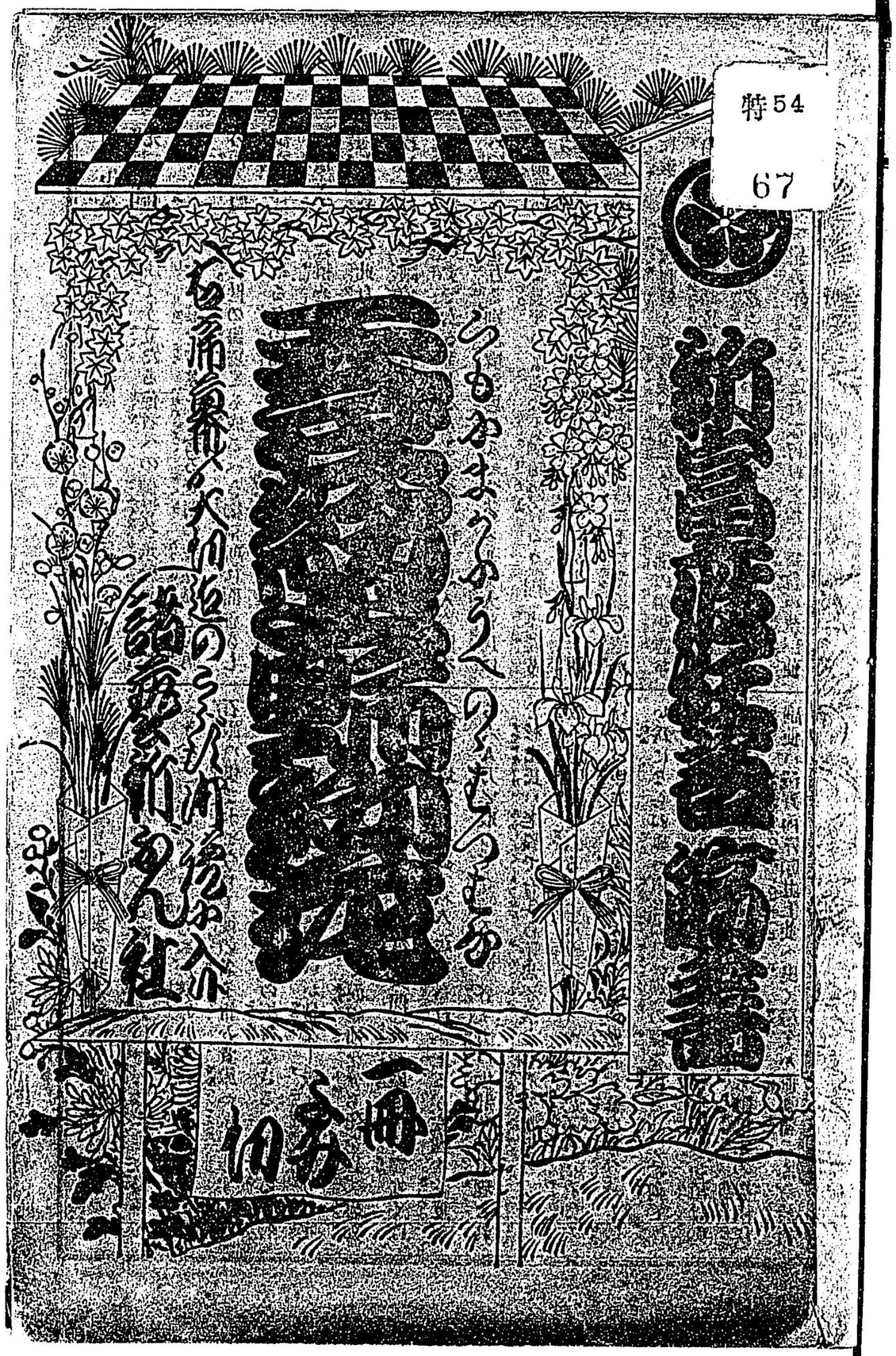

特54
67

074846−003−7

特54−67

新富座狂言筋書

諸芸新聞社

M14
CEK−0200

阿中幕　「千代琴松山美談」　上の卷讀つゞき

先刻正使碧田侯より立たる使者への御返答承給いつて感じ入る天晴武士の道を守り一命捨る覺悟の能城藏と忠勇の俊鴻魏賀に後世の龜鑑とも成るべき御兩所に面會おし詞交さば弓箭取る身の面目にて目談柄にもなる事と思ひに堪ず密かに推參致せし處折よく實殿に面會遂げ親しく詞を交せしい此身の本懐斯る時よ有らざれど猶も御談話致しけれど副使の役目長坐を厭へば如名殘惜くい乙れ共最早お暇致すで乙るト上るりよて名殘惜き思入左國次い信義な人と互よ別れ惜き思入よて（左）スリヤ大石氏にい副使のお役よ長坐いならぬと御歸營有るゝ（國）忠義も厚き杉山氏よ面會遂げ本懐遂れい今日いお暇申す又十明後十二日い副使の役にて入來致せ其時とそい當城を迎かに渡されよ役目終りて其後い公道ならぬ私抽の御懇志お出合申してお物語致そで乙るト上るり左國次い城を渡せと云ふ一言を聞忽ち氣をかへ（左）水谷の家滅亡よ流涙と成る某抽も慰み下さるい忝けなけれど惜い情仇い仇副使と首て城受取に乙る其城い決してお渡し申さぬト是より演詞五人に渡り上使が來る堀端へ出迎ひ皆々乾度なるト上るり有つて（國）各々方にい何故上使を恨み給ふヲ（左）上使に恨い乙らぬが將軍家の無慈悲を怨めを大石殿い恨まねど今日上使の名を惜み貴殿（敵對申す（國）コハ心得ぬ其詞何故不忠不義の振舞なさるゝト上るり特と聞もぬ（左）不忠不義といふ情なし一數年恩祿受りし主恩を報せん爲親と妻子を捨て涙の袖を分ち死を以て忠節尽すを不忠と言へるい心得ず（門）大石殿とて言譯なくば（狼）其場い立せぬ（六人）愚期召れト上るり左國次屹度なる六人刀と取つて立懸る（國）各々方い御壯年御道理なれど杉山氏い老臣で有乍ら不忠不義を御存知なきゝ（左）何故不忠不義で乙るト上るり（國）イヤ其不忠不義御存知なければ申さんが某抽元が各々方の忠義を慕ひ推參せし故お爲にならぬ事い申さぬ只當然の理を申さん（左）何と床の合方に成り○山羽守樣御亂心よて稻葉殿へお預け御制法よて家斷絶よ付城受取の上使い則ち御緣家の碧田侯副使い淺野内匠頭其上使へ曳く弓矢い離よ當るふど皆山羽守樣へ當る事を御存知なきか忠義と言へど不義の籠城既に公儀にてハ御主人を人質として御預け若御病氣平癒にて御仁恩に因て本地を給いんも計られず殊に戰鬪に及ぶ其隣國にい大家の後詰有り倉庫の兵粮際限有れば長くい保ず落城せん一族餘類に命を損させ數多人命を失ふ其罪山羽守樣の御身に掛り罪を增すゆゑ此を以て不忠不義と申すい餘も誤りとい申されぬい依て當然の心外を忍び今暫時皆一族を知邊へ使らせ時節を待ち故なく此儘納りて元へ戻らば死したる者が再生の悦び是主君の來公忠義とい申もべし夫も各々方の御了簡愛の道理を汲分られ能くけんりょを廻らされ平穩のお計ひが願い考う存ずる斯申すも忠義厚き各々方を惜ゆゑ失敬を顧見ず御異見申す内藏之助多罪御用捨下さる可しト上るり此時八ツノ時計鳴る○ヲム只今打しい來の刻思わぬ長坐お暇申す併御了簡よ依て開城の思召有ば酉の刻迄よ搦手なる内匠頭の陣所へ御沙汰有たと檜方殿共ふ談じ有て無事の計ひ肝要ど存ぜ升ト上るりよて各々是を聞理よ迫り自然首を低れ悔悟の体よて（左）ハヽア誤つて改るよ慙る事なしと僻地よ育ー頑固より一途よ無念と思しも大石殿の致解に始て夢の醒たる思ひト左國次も忠義と思つたい却て不忠義と云よ心付六人も了簡違ひで有ると後悔の思入演詞有る（左）最早抽者開城の心なれど同役但馬へト上るりにて此時與に（國右）不快に依て引籠りし檜方但馬只今夫へとト已前山石衛門出て大石が異見の諫禮越聞て居て不忠義の理解に感じて籠城なきゝの心得違ひ後悔致す大石の意見あくまで無益よ人命を損させ世の物笑ひと成る可ゝ腑に徹る敬聞の程忝け涙に袖を濕すト上るり有て左國次も國右衛門よ得心かと云ふ如何にも改心をたと云ふ六人も同意と答ふ國十郎が城い上使へお渡有が併一藩の吃方の心得いと問ふ上るり兵士大勢出て委細い次で聞て承知と答ふ（國）各々方も御承知ト皆々演詞有て（左）主家の廢亡小祿なり共（國右）再び家名立升樣（大勢）御了使樣のお取成にて（國）其義い正使碧田侯へ申し上ん（皆々）ハヽア有難ふムり升（國）然らば抽者ハお暇申すト立上る（左）ソレお見送を（國）今日是へ參しい私事故矢張夫形り（皆々）夫でい失敬（國）ハテ北盛ヨト肩衣を寛げるを木の頭○成し下されトキザミよ付太鼓の時の太鼓にて（拍手幕）（終）

○天衣紛上野初花　（前号の續き）

○第壹番目三幕目「大日樓二階の場」丑松の（小團次）此頃隆慶橋の有る屋敷で能銀法が出來ると押掛いどぶた（菊）能穴だが行引い（小）橋の水茶屋の婆〻アさ時に今友達が間違と仕た中直りよ播磨屋へ連込んだが一寸三両貸てと云ふ（菊）氣の毒だが今都合が悪ひ（小）夫でい外で算段仕様と笑へ（千代春の（梅三）出て其お金い私が貸そふと三両を渡し両人色合の演詞有て奥へ這入る跡（菊、半）見て居て千代春と丑松い能中と見へると云ふ上り口より丈賀の（梅五、仲太）の親子が財布を失つたと尋乍出る是を見て（菊、半）何を落したのか（梅）紙入よ五両入れたを遺失たと尋るお熊の（猿十郎）若者の（尾登）出て夫い鈍な事と共ん探す笑へ（お元の（ぎう調）出て丈賀さん落した紙入い是かと出すを探見て是に違ひ無が肝腎の金がないと言ひ乍中より お元が已前落した鍵の有つたを出し此様物が有ると皆や見て詮議するのい此持主（ぎう）コリヤ私の鍵ト是を聞（梅、仲）の両人ぎう調を捕へ此鍵か中に有からい其持主のお元どのが命取たサア返せとせかむ（ぎう）滝猿い其様盗いせぬと爭人九兵衛の（團右衛門）出て此偷盗いお元よ違ひない（ぎう）イヽエ其様穢き心い持ぬイヽヤ何でも盗んだと爭う奥よりお元の父喜兵衛の（鶴蔵）出てコレ娘情ない事仕て呉た不孝者めヤ盗をするとい人でなしと打擲して泣是と見て（菊）コレ皆の衆此盗人の見込い些違つて居やうせ今幾等言つても水掛論難義と見た故今已が三千歳から借た金鍵を五両の形代よ上様から勘辨して丈賀どん是を取て盗なせ（梅）鍵々お出のお客の扱ひ故鍵い人孔ぬ（菊）互の難義を扱ふ寸志だヤア夫を預つて置なと將棋に向ひ爺さんも短慮と云ふもの盗人の黒白慥よ夫と分らねへ娘ッ子を可哀そふよ手荒な折檻仕はへヤ能と帆言る鶴、ぎう 兩人厚く禮を云ふ國右衛門い不容邪魔だと云ふ思入有つて皆々下手へ這入る此時（猿）出てお いらん金子さんがお待兼（半）向行よ（菊）已いどふで床の抱人だ早往なよ（半）何だね（直さん）ぎさよ来るから嫌す よ居てお呉よ（菊）言いはへでも何痴でト煙管で灰吹を叩くを道具揃の知せ嫌られるものかト此仕組宜敷道具廻る

同三幕目「千歳座敷の場」本舞臺正面床の間夜具棚箪笥など書割能廊よ角の長火鉢側よ金子市之丞の（右團次）以前の（ぶん）新造の（清十郎）四人酒宴の体皆々演詞渡つて（たん）三千歳さんの身受のお話い丑松が留守ゆ来歸の上御相談致しかう（左）金よ糸目い付故指早ひが能ッ爪へ若者の（橘次）先ず太九郎の（つる）出て時お先生お姿いと聞此時（猿、半）出て来り（半）能お出なんしたの（左）イヤ能い来るが嫌れよ来た其度毎癖を出鬼たゆ君ろの根を断て遣ふと思つて（半）何様して夫を（左）身受する（半）エヽ（左）通て来ても終よ一度帶紐解ず癖お紛す横着ゆの一躍武士が思を懸じ上がらい意地を立其き宿の妻敵役の（皆）金子さんがお身受ぢさい此上も無ひお伍合ト此内階間で居て頸を上（半）此身受い お断りと仕升うよ（左）何だと（半）お志い嬉しいが私しや契約た男が居んす（だん）夫い不了簡と云ふもの身受になれば間夫ヤ反古（左）サア不可ッ有なら是非がない断る様よ呼を明ろ（半）そが爭又何を（猿）ソレ日外貸さたソ百両も元い金子さんから出たお金（半）エヽ夫でいアハお金も（左）ヲヽ其方が言ひ爲換たと言ふ男い高の知れた安御家人女房よ成つても内い其様盗いせぬと爭人九兵衛の（團右衛門）出て此偷盗いお元よ違ひない（ぎう）イヽエ其様穢き心い持ぬイヽヤ何でも盗んだと爭う奥よりお元の父喜兵衛の（鶴蔵）出てコレ娘情ない事仕て呉た不孝者めヤ盗をするとい人でなしと打擲して泣是と見て（菊）コレ皆の衆此盗人の見込い些違つて居やうせ今幾等言つても水掛論難義と見た故今已が三千歳から借た金鍵を五両の形代よ上様から勘辨して丈賀どん是を取て盗なせ（梅）鍵々お出のお客の扱ひ故鍵い人孔ぬ（菊）互の難義を扱ふ寸志だヤア夫を預つて置なと將棋に向ひ爺さんも短慮と云ふもの盗人の黒白慥よ夫と分らねへ娘ッ子を可哀そふよ手荒な折檻仕はへヤ能と帆言る鶴、ぎう 兩人厚く禮を云ふ國右衛門い不容邪魔だと云ふ思入有つて皆々下手へ這入る此時（猿）出てお いらん金子さんがお待兼（半）向行よ（菊）已いどふで床の抱人だ早往なよ（半）何だね（直さん）ぎさよ来るから嫌す よ居てお呉よ（菊）言いはへでも何痴でト煙管で灰吹を叩くを道具揃の知せ嫌られるものかト此仕組宜敷道具廻る

同三幕目「千歳座敷の場」本舞臺正面床の間夜具棚箪笥など書割能廊よ角の長火鉢側よ金子市之丞の（右團次）以前の（ぶん）新造の（清十郎）四人酒宴の体皆々演詞渡つて（たん）三千歳さんの身受のお話い丑松が留守ゆ来歸の上御相談致しかう（左）金よ糸目い付故指早ひが能ッ爪へ若者の（橘次）先ず太九郎の（つる）出て時お先生お姿いと聞此時（猿、半）出て来り（半）能お出なんしたの（左）イヤ能い来るが嫌れよ来た其度毎癖を出鬼たゆ君ろの根を断て遣ふと思つて（半）何様して夫を（左）身受する（半）エヽ（左）通て来ても終よ一度帶紐解ず癖お紛す横着ゆの一躍武士が思を懸じ上がらい意地を立其き宿の妻敵役の（皆）金子さんがお身受ぢさい此上も無ひお伍合ト此内階間で居て頸を上（半）此身受い お断りと仕升うよ（左）何だと（半）お志い嬉しいが私しや契約た男が居んす（だん）夫い不了簡と云ふもの身受になれば間夫ヤ反古（左）サア不可ッ有なら是非がない断る様よ呼を明ろ（半）そが爭又何を（猿）ソレ日外貸さたソ百両も元い金子さんから出たお金（半）エヽ夫でいアハお金も（左）ヲヽ其方が言ひ爲換たと言ふ男い高の知れた安御家人女房よ成つても内 （左）飛んだ奴が舞込んで遊興の邪魔をされた座敷を換て

呑直そふ(猿)夫いそふとお妹金子さんから借た百両たつた今返しなさんせ(半)サア其お金い、常盤の扱態菊五郎思入有て懐ろより百両包を出し(菊)其白両を返して仕まへと投出す半四郎嬉き思入ずて取(半)ヤア改て受取なんせト是にて皆々伺りを乞(猿)思ひ掛ない此お金(小)サア金を返しやア思ひらなしたト息返を(菊)此様事よ怒ッちやア竟出せねへを宥る此内猿十郎い半四郎へ金の證文を戻す如何じて出來たと云ふ扱態菊五郎い始終悔しいと云ふ思入有て(菊)金い世界の湧物だ水の藻か金か改めなせへ(左)道い立涙ア申分幡に金い受取たが岸岡どの〳〵近付よ是から一杯遣おから駐春亭迄突合つテ見なせへ(菊)折角の思召故お供致じて参り升ら〻皆々演詞渡つて左團次い身受が成らぬ殘念ト云ふ扱態有て(左)屹度此方を待て居るそよ(菊)御念ハ及ばぬ(左)ドリヤ往ら〻か皆々奥へ這入跡に(菊、半、小)三人殘り無念を怨し扱態有て(菊)丑松能辛抱じて呉た(小)胸を撫つて堪へ升た(菊)ヲ〻〻尤だ已もいづもなら金を叩き返じて喧嘩をするが手出しをすりやア也分の負遁恨を返す時節も有沒不肖

を〻ろ〻寄る(半)ヤテ今のお金の山處い〻に此時上手障子の内より河内山宗俊の(團十郎)好の拵へ出て出せおれが貸だのだ(半)況なら貴君が(團)曰も二階で片岡が今の手詰を見兼なゆへ慈にて半四、小團の両人禮を言ふ(團)(菊)お些詰が有が外の座敷を借さいと云ふ故新造の(梅三、酒十)おや〻三人が久んなら此間よお妹い外の座敷へ(半)況ちゆつくり話なさんせト半四郎先に三人付て奥へ這入跡ゑ團、菊の両人殘り(菊)ヤア其話を云ふのい(團)其方も知つて居る私が不斷懇付のアノ上州屋が引餘義おい願(菊)夫りゃア何如様だね(團)彼處の娘が松江家お小姓が勤で居るが暇を願て居暇が出ぬと所縁の都勞を見兼で暇を取て遣ゑ〻受合たが此十二月の年忘れに其方を相手ゑ茶番をすん氣で一狂言曰が聞た(菊)ヤア其狂言い(團)世話を時代を持込んだ妙案だ(菊)夫い早く氷謂が聞てへ(團)片岡お前ゑい麻上下大小の役を當たが本謂い今夜根岸の杉非の宅で(菊)夫じやア是から一所ゑ行ふ迄此時小團次出て(小)壁ゑ耳有地樓上少も早く根岸へお出なせ〻(團)ヲ〻能藏を付た然じ今貸た百両貸て半金

揃料屋へ手附ゑ遣てへがどおか工夫い有めへが(菊)ろゑ云ふ事なら跡で三千歳と相談するから兄貴い先へ(團)夫なら裾籠で一足先へ出かけやうア〻寒ひト嘘をする菊五郎思入有て自分の羽織を脱引らけてやり(菊)夫風でも引と初日前だ(團)夫じアや借て往よ小團次付て下手へ這入爰へ半四郎出て(半)最前話た草加の客へ無心を言つた五十両が届たと金包を出し(菊)ろいつれ調度能呼吸だ兄貴へ是を返すと仕やうト金を懐中する(半)お前歸るのがへ(菊)根岸へ行のさ(半)ヤア今夜が能しやア無か(菊)夫でも今夜に限る事だ(半)夫でい屹度此方へ歸初てお出よ(菊)エ〻又極りだト厚綿衣を引掛るを道具横り待て居なよト道具廻る「吉原田甫根岸道の場」「本舞臺中足の堤提折廻」田甫より吉原を見たる灯人の遠見柳の立樹都て根岸道の道具に納る」爰に小按摩の(鳳七、音丸)出てモシ何時て有うと此様言を云つて呼乍別れ上下へ這入ふより已前の左團次、鶴藏先に駐春亭の貸提灯を持出て(左)片岡が來る約束に待ても見へねば出掛たが(鶴)イヤ彼奴聽病風に透引たと見へる(左)爰に待伏片岡めを引て捨是非

ゑ身受をせねば成ぬト爰へ以前の團石衛門出て(たん)金平様か(左)ヲ〻九兵衛か彼奴ゑい如何ゑ(たん)根岸へ往と駕で出たが其目印い店の出入の駕屋の提灯殊ゑ垂から出懸る羽織が脇擦(左)然らば待受はつさりと(團)拙者が助太刀ト三人言ひ合せ有つて左團次い刀をぬき三人鍔擦へ這入上手より駕舁の(八平次、音扇)四ツ手駕を擔出て(八)旦那如ゑ待遠で厶り升たろうと云へと答なさゆへ乘を上見て(音)旦那いお夢で大鼾だト此時左團次頬冠扱刀にて窺ひ出て棒鼻へ刀を閃せ恟じて(八、音)駕を擔廻て道入この時彼蔭より菊五郎此体を見て忍ゑ左團次い提灯の火燈に乘を上中を見る内ゑ團十郎睡て居るを見て(左)ヤ片岡と思の外ト此聲ゑ目と醒じ(團)駕屋〻〻と呼左團次い灯を吹消す双方不審の思入有て(團)今光つたのい自と配る左團次刀を鞘へ納る菊五郎い駕の上より顔を出す團十郎思入有て(團)今光つたい星が飛たのかト扱態左團次い能度恟だと云ふ思入三人思〻〻の扱態有る三方一時を木頃キ〻ヨ付時の鐘騒唄にて引敷拍子幕

○三幕目「松江家上屋敷の場」「本舞臺向ゑ彩色襖の金襖

同人横間を下に游縁を敷都て松江家臣殿の撥琴唄よ
で幕明」と下爰より腰元の(三筋、此糸、あやめ)尼並び(皆々)
氣の毒なの浪路さの宿がお暇願に出てもお出游なく老女
岩崎さまのお部屋へ押込夫と云ふのも容貌の伝のが其身
の拙可哀さうと演詞渡るパク〳〵にて奥より松江出雲守
の(家橘)羽織形抜刀よて腰元振袖形浪路の(半四郎)を追
回る跡より袴形近習(瓢宮崎數馬の(小團次)是を留作
て先々お静遊され升う(家)イヤ〳〵手に逆らう浪路手
討致す(半)死ぬるの覚期お手討に遊ばし升せト是より小團
次種々謀言する演詞三人の渡り半四郎の覚悟ゆへお手討
と動ぜぬ体家橘已と息込爰へ下手より北村大膳の團右衛
門裃形にて暫〳〵と聲を懸出て(たん)其罪糺さず御成
敗有の無道故數馬が罪より糺でムらう(小)何拙者罪を糺
さと(團)是より團右衛門が數馬浪路を不義として居ると
云つて怒付る両人恐れ駭く家橘の夫で數馬が浪路をかば
ひ立するかと思入團右衛門の頻に両人を不義と云ふ両人
替る〳〵に汚名を云解く夫なら不義と云ふ証據が有るか
無ば白状致させ見せんト爰へ襟形老女岩崎の(梅藏)出

て両人の不義密通したに違ひないと演詞渡り皆々立懸る
ゆへ(小)貴殿等如きの詮議を受んや(たん、鶴)何をト立
上る此時向ふにたゝヤ両人呼召れ〻壁を懸織祥の
形家老高木小左衛門の(宗十郎)出て宮崎數馬に成換御返
答申上ん(たん、鶴)ヤア恐ひ掛なき御家老の御出仕皆
〳〵演詞有て(宗)御前背君樹の為非程より緩怠極まる腰
元風情に御親心御慈悲有つて操を守る浪路を捕て不義と
一問へ押込め剛お手討なさるとは一國一城を乗取し召る
〻御所業が(家)ヤア(宗)夫を見兼て是なる數馬か御諫言
申上るを却て不義の御難題夫も申もお側よ付添ふ侍者
ある故に大膳居崎を當て立する諫言宜敷有る家橘の立腹の
思入(家)不届諫言此上申さば手ぬ見せぬぞ(宗)斯迄申を
御採用なさ[illegible]お家の為よく撰べ剛じお手向も仕る(家)
ヤア憎くき一言夫大膳切て捨ひ(たん)お命なければト抜か
ける刷にて左やんと留(宗)ハ身等如きが刀盤刃金が忠義
は鍛し此五體に何で並ふや(たん)何をト撞る刷であ[illegible]ろ
う立廻り此時向ふより検侍一人出て来り(侍)唯今上野
宮様よりの御使御人来でムり升(家)先鋒なさに上野

よりの使僧とは心得難し(宗)宮のお使者とは不審見(小)
何ぬ然れ御前様よりお出迎ひと家橘が不快ゆへ両會致さ
ぬと申せと奥へ這入鶴藏浪路とのみと引立て悪を宗十郎
が浪路にも申聞す事有る故拙者が預ると云ふ是にて團右
衛門奥へ這入宗十郎小の三人殘り侍人側に有りて諫申さ
ぬ御所辯嘉のみと演詞渡つて浪路が暇願に屈せてやる
が今爰に内談も有れば暫時奥へ扣よと云ふ是よて半四郎
禮を云つて這入宗十郎思入有つて宮よりのお使が君御亂
行が聞へてかト両人演詞有つて宗十郎左有る時よりの何事
も吾腹一ツに引受て(小)ヤリヤ覚悟を(宗)思案の極意
は外に仏らぬと此仕組宜敷道具廻る○「同廣書院の場」
「本舞臺彩色黄銀模時計の音よて道具納る」ト向ふより上
野の使僧北谷道海の團十郎紫ノ衣錦の袈裟水晶の數珠
を持近習二人案内して出る是も二時上手より宗十郎小團
次近習の竹次郎升藏尾登五郎橘次上下形に出迎の演詞有
て(團)宮の内意を承給わり罷越したる北谷道海ト是より
主人病氣で代人なら帰ると宗十郎も種々演詞の末家橘出
て面會ゑて御内意故皆の次へと是にて皆ず這入両人み成
が是より團十郎が腰元浪路へ暇を出せと云ふより家橘い
出さぬとの双方演詞種々有て〻家橘承知ゑて暇い遣と
返答有て病中御免と奥へ這入直よ近習膳部を持出る飲食
が欲ふなしと辭る小團次臺に目録包のせて出しを(團)
何出吹を嗅きたる天地金の末廣恥走い是よ限つたものさ
此仕組宜敷道具廻る「本舞臺向ふ鍛模保違ひ棚居間の
道具爰に家橘尋ね坐る腰元四人居並び演詞よ御前様い何
が考へ遊ばで御不興の御答を云ふ家橘が考へる筈今
上野より使僧に參つたいろへ思出じたい數寄屋坊主の宗
俊に似て居る大膳を呼と團右衛門出る其方使僧い宗俊に
相違なひが目利致せと是にて團右衛門見來て違ひないと
云ふ鶴藏出て浪路い使僧の供が遣て往たと云ふ家橘殘
念がる團右衛門宗俊を捕へんと立上る小團次出て諫る家
橘無念の扱態小團次諫る仕組にて道具廻る「本舞臺其中
式臺向ふ大形の張付玄關先の道具に納る」團十郎先に見
送りの近習付出て團十郎草履を履ふとする上手にて御使
僧暫らくと呼留る團右衛門出て見顯しの演詞両人有
のてトト河内山だと縛つて若年寄へ引渡せ其替り松江

家の興廢ゑ拘わるぞト國右衛門詰る爰へ宗十郎出て無禮の旗怒い穩便ゑ此儘御歸院下さる可(國)矢張御使僧で歸院致さうと花道能所へ行國右衛門を喇るゆへ(だん)引縋てと息込此時家橘小團次出て吾君の御出座なるぞ(皆々)ハヽハアト平伏する仕組にて拍子幕引付て幕外向ふより僞役の直侍の(菊五郎)上下大小股立にて出て兄貴旨いつたゝ(國)首尾能娘を取返した(菊)そいつァ大手柄だと兩人宜敷向ふへ這入ト跡ンヤギリ

○四幕目「橋場寺田住居の場」「本舞臺常足家休向ふ佛檀鼠壁總て裏長家の体紙砧ゑて幕明ト茲ゑ幸兵衛の妻お元の(ぎう調)世話形屑買の(升藏)米屋の(さい助)居て兩人の演詞ゑ幸兵衛さんい長者町から此橋場へ引越したゝ元い素讀をーて能器で有たゞ長の煩で有つた故困窮しなさると屑買い今日無事と曾た掛物を買ひ米屋價を取つて兩人這入跡にぎう調演詞有る爰へ家主佐次兵衛の喜知六出店賀が五月溜りたと催促ーて主が歸つたら又來ると這入此時筆職の寺田幸兵衛の宗十郎紋付古羽織山水な形跡より島屋の手代の(ぎやと六)ヤ〳〵爰らゑ幸兵衛さんといふ人い有升かといふ故其幸兵衛い私と内へ這る左樣おら申升私い島屋の使此方の緣家から店へ勤て居る半七殿が掛先を二百兩受取儘歸らぬ故立廻つて來ざら知らせて呉を這入跡ゑ(宗、ぎう)兩人がお元の弟半七が持逃する樣な心でないがと案事るお元い米の價ゑ屑買ゑ掛物を買つゑ事を話す(宗)今日無事と已爻が手跡惜い事したと悔向ふより直次郎の(菊五郎)三千歳の(半四郎)好の拵にて出て來り今日いお前のお蔭田甫道を大層歩行た私い母さんの墓參を撕したゝ向い世話になるお針のお元さんの宅尋よふと兩人昔信る見てやお妹かと是より四人挾拶有て甲子屋から二ッ物の土産を持來る巳前の(喜知)出て店賀を喧しく云ふ見兼て菊五郎が店賀を立替て遣る喜知六悦び金持つては入宗十郎ぎう調禮を言つて御緣もないお方樣にと云ふ(菊)イヤ緣ぢないとおつーやるがお忘れなされしか子供の時の恩返し(宗)恩返しとおつしやるいト是より菊五郎が其以前貴君の親父幸之進樣ゑ素讀の御指南受た直次郎今川端で今日無事と先生のお筆見屋有と屑屋ぢひろげ見て居たを買戻して上升と出す(宗)夫で

い片岡直藏との、御子息かと互ゑ是より昔語有つて今の困窮面目ないと皆々涙に呉る蓙六ッの鏡ゑ(菊、半)名殘惜くも又其内と兩人向ふへ這入跡ゑ兩人種十演詞床の上るりゑ成り向ふより序幕の上州屋の丁稚新之助の(菊之助)出て山谷迄お使に來た故尋升う母さんが内なら能と内へ這入(ぎう)ヤ〳〵新之助かト菊之助父の病氣を尋笹折の鮨をれ爺さんがお好ゆゑと出す(ぎう)夫い能氣が付たが如何てお錢を持つて居ると云ふお屋敷からお下りなされたお嬢さんのお土産と又金包を出し是をお小遣ゑといふ兩人い見て一分銀で一兩有る子僧の身で如何て是をと問ふ拾つたと答る是より怪しいと宗十郎い金と包んだ紙より責問ふ故是非なく盗升たがお二人の御苦勞を助たい爲と始終上るり文句有つて三人涙乍ら扱態有つて盗をする子い不孝勘當と云ふ菊之助泣伏すぎう調宥る(菊之)此後心を改る故勘當を免て呉と云ふ何ゑせい日も暮れば主家へ送つてト是ゑて ぎう調菊之助を連向ふへ這入跡へ半七の家橘出て主人の金を街取れた言譯い死ぬより外いない姉さんゑ一目逢つて別を告んト内へ這入る宗十郎見て半七かハイ誠ゑ御不沙汰姉さんハ今下谷ゑ迄行つたと聞殘り惜いト思入にて姉さんに何卒宜敷と行懸るを宗十郎がコレ二百兩を路用ゑして上方へでも行氣か家橘エヽと悔りする是より最前島屋から人が來て知つたが二百兩い如何たと問ふ家橘い檜木の屋敷でいかさまゑ懸り二百兩取上られて仕舞たと委敷話すを聞その檜木と云ふい勝負事をする名うての屋敷とんだ目に逢つたなと思入此時菊五郎外ゑ立聞仕て居て内へ這入り買戻た掛物を上たと思つたが置て行ぬ故立戻て思わずも御家内の舍弟が檜木の邸で二百兩欺き取られた事慥に聞升たゞ嘸御難義と察し升師匠への恩返し私が取戻じて上升うと是にて宗、家兩人禮を云う菊五郎宜敷有て向ふへ這入る跡へぎう調歸り來て半七ゑ今道で片岡ゑ逢つて容子い聞たと云ふ宗十郎い悴の詫い如何た首尾能すみ升た家橘が此上い二百兩が無事に戻れば宗十郎がイヤ私慾に仕た事でいなしト掛物を出し今日無事に納ると云ふ事かと皆々悦ぶ仕組にて宜敷幕

○五幕目「田甫田茶屋の場」「舞臺向ふ耕地の書割葦簀張

の山茶屋合方時の錨にて幕明」ト爰に茶店婆の喜知六檜木家中間勘次の梅五郎木屋と小道具屋相中三人稽羽織大小形太兀藏の鶴藏山て居て床机に茶を呑作當の話を仕て居て鶴藏先へ這入向ふより札差の拵伊勢屋清三郎の菊五郎出て演詞有て當の當なゞを聞是より梅五郎喜知六の兩人檜木家で題付の元をするから是非往けと進る菊五郎往て見たいと喜知六が案内をると云菊五郎へ今直用を達して後より這入是にて皆々も檜木家へ行と這入道具廻る「舞臺常足の二重石摺の襖下手一間の玄關綿で檜木東左衛門師の体合方調よて道具納る」茲よ羽織袴形檜木東左衛門の左國次留袖形娘お真の玄う調親東左衛門よ翁見の演詞渡つて羽織袴同衆の門蔵荒次郎出る向ふより梅五郎出て今伊勢清を連て來ると云ふ向ふより喜知六菊五郎を連出る左國次に拵挨有て奥へ這入直向ふより丑松の小國次札差手代の拵にて山て主人の申付五百兩持參したと案内有て奥へは大跡よ左國次五百兩ハ吾ハ懐へ入れが同然と悦此時鶴藏山て今遠見をしたよ伊勢清といふハ悪者の直侍と云ふ左國次驚く考う調出て異見の件にて道具廻る」「舞臺奥座敷の道具に納る」「茲に皆々富の雛形を置金を並べ花合を仕て居て菊五郎勝になる爰へ左國次山て其稽古仕舞て貰ひ皆々何故と云ふハや相手が氣に喰ぬ伊勢清と云ハ直侍だ皆々ハ思入鶴藏山て直侍に逢ひと云菊五郎見知人が山たらモツ頭巾を脱ずやなるめへと是より小國次も共よゆすりの演詞種々有る爰へ下女山て堀田原よりお客がお山と云ふ是を幸ひと左國次奥へ這へ跡に鶴藏五十兩で歸て呉と扱ふイヤ此間半しから取た三百兩を取返て來たのだ此時奥より二役市之蒸の左國次山て演詞有て二百兩を出し扱ふ是よて菊五郎金を取小國次付て向ふへ這入左國次扱態道具廻る「舞臺向ふ中遠見瓦屋根赤塗の長家門都て小石川水戸前の道具波の書よて紛ると直よ狗吟よなり向ふより羽織着流形半七の家橘山て直次郎が受合で呉た二百兩が出來ねハ身を投青譚するより外ハ無いと云向ふより菊五郎小國次山て家橘よ逢ひ今檜木家で二百兩取返したと金を渡ず家橘悦び小國次付て上手へ這入爰へ市之丞の左國次山て兩人演詞有て片岡其方が命申受るヤア其方首討と居直る打兼る思入有て此場ハ見逃すと宜敷有て相中やつし尻端折に走出てお咄〳〵と呼て向へ這入を見て(菊)ア、是も咄の種だなア

ト時の鐘波の音拍子幕

○六幕目「本舞臺常足二重入口よ蕎麥温飩の障子外に行燈看板蕎麥屋店先夜の体茲に相中の仕出蕎麥を食つて居る一面雪降の拵樣雪御よて幕明」ト爰よ蕎麥屋の亭主の國五郎女郎の拵の鶴藏皆々演詞有て向ふより菊五郎出て立客大口樓の寮を聞爰へ按摩丈賀の梅五郎來て寒ひとそばを食て大口の三千歳の療治よ寮へ行と話す是を聞菊五郎硯を借鼻紙へ文を書代を拂ひ外へ出る知せなし此道具半廻しよ成り菊五郎出ると梅五郎出で行懸るをヲイ丈賀ぞんと呼梅五郎立戻る世話乍此手紙を三千歳へ届てと頼ヲ、片岡樣のお壁慥よお届申升と這入下手より丑松の小國次赤合羽竹笠よて忍出て菊五郎よ逢ひ親分斯うして居られないせふ前の悪事が顕れたか淺草迄へ手が這入たせ夫なら大坂へふけやうと示合の演詞有て兩人別て菊五郎向へ這入小國次跡を見送り宜しく扱態道具廻る「舞臺大口寮三千歳部屋の道具よ納るト爰よ三千歳の半四郎小按摩よもませ新造二人居て演詞有る爰へ丈賀の梅五郎出て菊五郎の文を届る事有て奥へ這入跡よ半四郎菊五郎呼入度ゞ演詞爰へ九兵衛の鶴石衛門お針お元のしう調出て菊五郎を待合連て來ると言合有て奥へ這入引連へて寮番喜兵衛の鶴藏出て演詞有て新造に是ハ裏口の鍵入用の事が有まいものでも無しと渡も仕組にて道具廻る「舞臺常足三間家体化粧庇櫛形柳形庭物体風雅の跳へ下手よ中二階伊達簾を卸し寮別座敷の体絵で雪積し道具雪おろーよて納るト口上觸有て知らせ伊達簾捲上るト茲よ清元連中居並び上るりに成り向ふより菊五郎乗下駄乞きにて出て一寸花道よ振有て舞臺へ來り文句の内裏口の門へ突當る鳴子の音是よて裏口より新造出て菊五郎を内へ入る此容子を小蔭に伺ひ居たる忍の者思入有て向ふへ走入舞臺ハ半四郎出て菊五郎よ逢ひ文句と演詞有てトヽ(菊)迎も遅れぬ吾命亡跡頼と云ふ(半)私も共よ此場で殺してと爰へ喜兵衛の鶴藏出て共ゞ異見して二人よ立落を進る件よて廻る「舞臺田甫道の飾付二面の雪降爰に以前の聞石衛門ゑう調兩人立廻りの見得雪御よて納るト九兵衛

いお元を欺して連出横戀ゝ口説けど得心せぬ故殺ろふとするを突然捕手二人出て國右衛門ゝ縄を係る仕組ゝて廻る「舞臺元の寂塵敷の道具に戻り納る」ト茲ゝ屏風を建廻し有る床の上るり新造出て屏風を退る内に菊、半居て演詞扱態有る爰へ鶴藏出て今爰へ市之丞が來ると云ふ直に左團次雛目の扱態ゝて探り乍出る菊五郎い屏風の蔭へ忍伺ふ左團次身受すると云ふて直侍の事を罵る故菊五郎堪へ兼出て演詞有てトヽサヤ已を殺せ斬と云ふ皆々止る爰へ市之丞の逸ひの者駕を擔せ出る左團次思入有て立上り据た度胸サヤ三千歳い片岡そちゝ呉て遣るト年季謡文を投てやり駕ゝ乘向ふへ這入跡に菊、半體文を見て兩人演詞思入有つて此場を直樣立退ふと兩人身拵する爰へ手先の拵忍の兩人出て菊五郎へ捕たと懸る一寸立廻て(菊)モウ此世でい逢わぬぞ半二人を投向ふへ走行跡ゝ半四郎歎泣落す雪卸にて幕ツナギにて引返す○同返ト一人谷田甫の場「舞臺太郎稲荷の邸の後ろ入谷田甫の摸樣を書割の張物兵中に土手丸木橋をかけ處々畔道二面の雪布夜分の景色雪卸題目太皷にて幕明ト合方ゝ成り鐵壁を押破り手拭ゝ面を包菊五郎邊りを伺ひ忍び出る畔道を傳ひ花道へ行かけるを跡より手先の者の拵ゝて忍寄捕たと懸る〻〻〻と跡戻する此時下手ゝ同じ拵の者四人出て立廻りゝなり畔道を巡る仕組トヽ取卷を潜抜て向ふへ這入と上手より玄う調下駄を手に持出て爪付き菊五郎が落した紙入を取上る捕人是を取押べる仕組ゝて幕

○七幕目「上野黒門外の場」「舞臺向ふゝ黒門能所に兩大師の建札左石垣腰の土手樹木茂り夜分の体本釣鐘風の音ゝて幕明ト爰に相中四人片岡が子分の拵べゝて親分が悪事のなくが割お手が這入たから親分の身の上が案那られると四人演詞有るバタ〻〻ゝて向ふより小團次頭上に疵を受血汐の體白布に卷し拵にて出刃庖丁を持走出てヤイ手前達にも親分だう直侍と言われる者が吾身のつき廻つたと此方等を訴人するとゝ頼母敷ねへ夫故已もお手に逢ひ疵迄受たが逃延たも親分を切殺し恨を晴す了簡だ四人が親分にゝ其樣事いはへ手前が了簡違へだと留るをきかぬ爭ひの立廻りにて此道具廻る舞臺中足家体化粧此本樣風雅なる造り例の處ゝ条門縄て入谷河内山別荘の体雪卸ゝて道具納るト二重の上に宗俊の國十郎羽織形下手ゝ和泉屋清兵衛の鶴助町人形り上州屋の後家お槇の繁松居住ひ三人宜敷扱態有つて鶴繁の兩人ゝ先達ゝ娘浪路が松江家ゝ永のお暇出ぬ所をお蔭さまにて漸ゝ宿へ歸りて有難ふ存ゝ升就てゝ仰越され升た金子御用立升と二百兩出して渡す國十郎受取禮の扱態種々有て近頃贈の有る松江家へ上野の偽せ使ゝ抽者と片岡直次郎が仕組んだ事だと話す聞て兩人恟りする故イヤ然此末事露顯する共抽者獨で引受各々方ゝ迷惑ゝ懸ぬ故案事るなと云ふ是ゝて兩人暇を告向ふへ這入引逸ひ向ふより菊五郎忍び〻〻出て乗戸の所へ來て内を覗く國十郎館見合せ點頭合ひ内へ入る菊五郎扱態有て今入谷田甫で捕人に圍れゝを漸く切拔たが逃も江戸ゝい居られぬ故是から甲州路へ落延ると云ふを國十郎が今更隠れる土地いないお手が入つたら愚悟して捕人を待て常に男らしくもるが能成程ろふた比興末然に隠れてもどふせ一度い天の網度胸を据へて騒ぐめへと思入國十郎が寒さ凌ゝ一盃やろうかそいつゝ何寄と酒宴になる此時乗戸の外ゝ捕人出て内の容子を伺ふとたん奥にてバツタト音する兩人恟りする扱態下女出て今鼠が落じに懸り升さと兩人是を聞顔見合せ頓て二人もト氣味合有て孫ゝ乗戸ゝ宜敷道具廻る舞臺奥中ゝ屋根付風雅なる門割烹家の人口左右建仁寺垣門ゝ今日見世開と記したる紙札ゝ貼上下へ蒸籠酒樽の積物數多提灯を點し都て下谷廣徳寺前料理屋店開の摸やう家体囃子ゝて道具納るト直に上手より子分の拵にて相中四人出て來てコレ皆なも今見る通り遊い河内山とい、片岡の親分といひイデ鎌倉と言ふ日ゝやア逃隠れいみつともねへと度胸と据て末練心なしサアお逃なせへと奇常ゝお縄を受たい立派なものだと此樣事を言つて皆々下手へ這入と上手より半四郎玄う調の兩人出て來り直次郎の身の上を案事尋ねて愛迄來たが容子が知れぬと兩人演詞有て質と思入此時上手より市之丞の左團次羽織大小にて出て來り三千歳待やれと呼留今言ひ聞す仔細ありと是より不思儀な事にて素性がわゝり思ひを懸し三千歳い此市之丞が血を分たる實の妹で有ゝとい夢ゝも知らで迷ひの雲霧知つて夾然晴行空顔も夕日の面目も心ゝ洗ふて調りも清年季蘭交取戻

しアノ片岡に添わろうと思ひし事も情なや今日片岡い捕縛と聞と昔話の因果話と種々の演詞半四郎さう調是を聞駭く扱態有つて兩人種々因果話の演詞有つて泣伏す向ふより菊五郎縄に懸り相中大勢手先の形にて付出る跡より見送りの子分相中大勢付出て來る半四郎さう調見て歎く菊五郎い送りの者へ禮の挨拶有る是より子分の皆々扱態有て橋懸りへ這入と引違以に小團次以前の形にて出乃庖丁を持走り出て菊五郎を見るよりサア行がけの駄賃をやろうと突然切つて懸るを手先の皆々引留るを振拂ひ一寸大勢と立廻りトゝ取押へらゝ縄に懸る此時上手より團十郎羽織着流形にて相中手先の者大勢の中へ闖り出て悪事と知りつゝ爲した業終にい天の宛し給わず今日爰に至ると悔悟し今常尋にお縄頂戴いたその心菊五郎某とでもろの如く天網がゝる今日と覺悟の上にて此有樣ト兩人思入皆々見でテモいさぎよき二人の心底ト此時うしろ料理屋の内にて目出度〳〵シヤン〳〵と手を打皆々コリヤ能幸先ト家体囃子にて宜敷幕（終）

○猿屋平七○魚島太兵○紀國屋清吉○上総屋[illegible]○東[illegible]○[illegible]○岡卯右衛門○山田屋[illegible]○[illegible]○屋秀吉○川島直次郎○平野屋万吉○三州屋幸

○諸藝新聞

毎月發兌繪入半紙七枚製冊　代價三錢

右い歌、俳偕、川柳、香、茶、碁、將棋、舞樂、能、芝居藝計、角力、講談、落語、淨瑠璃、小唄、トゝ逸、宛物、模放珍聞、諸藝術の古述、百般の人情續き物語、其他是に關そる事い新古をいとわず餘さず洩さず記者筆の力を尽し書綴り著わし貴覽にそなへ申候間四方の風君相替らず御討判を幾重にも奉希望候さて是まで各座狂言筋書一冊定紙六枚之處今時新富座新書幕數多く一部讀切ゟ綴り兼此程上の巻發兌仕候然るゟ部數格別賣捌相成候に付下の巻を八枚として何れも御客樣方へ御禮の爲御覽ゟ入ます仮寄り〳〵の商人見世よて澤山に御求の程を奉願ると口上を一寸とうくの如し

明治十四年二月廿五日御届同四月十六日出版○定價三錢

編輯兼出版人平民　山下金三郎　麹町三丁目九番地